

# 鼻

芥川 竜之介



一冊堂青空文庫



## 鼻

芥川龍之介

禅智内供ぜんちないぐの鼻と云えば、池いけの尾おで知らない者はない。長さは五  
六寸あつて上唇うわくちびるの上から顴あごの下まで下っている。形は元も先も同  
じように太い。云わば細長い腸詰ちようづめのような物が、ぶらりと顔の  
まん中からぶら下っているのである。

五十歳を越えた内供は、沙弥しゃみの昔から、内道場供奉ないどうじょうぐぶの職のぼに陞のぼつ  
た今日こんにちまで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た。勿論もちろん表面で  
は、今でもさほど気にならないような顔をしてすましている。こ

れは専念に当来とうらいの浄土じょうどを渴仰かつぎやうすべき僧侶そうりよの身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それよりむしろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だったからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云う語が出て来るのを何よりも惧おそれていた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だったからである。第一飯を食う時にも独りでは食えない。独りで食えば、鼻の先が鉢かなまりの中の飯へとどいてしまう。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食う間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げていて貰う

事にした。しかしこうして飯を食うと云う事は、持上げている弟子にとっても、持上げられている内供にとっても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子ちゅうどうじが、嚏くしゃみをした拍子に手がふるえて、鼻を粥かゆの中へ落した話は、当時京都まで喧伝けんでんされた。——けれどもこれは内供にとって、決して鼻を苦に病んだ重おもな理由ではない。内供は実にこの鼻によって傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。

池の尾の町の者は、こう云う鼻をしている禅智内供のために、内供の俗でない事を仕合せだと云った。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思ったからである。中にはまた、あの鼻だから出しゅ

家<sup>つけ</sup>したのだらうと批評する者さえあった。しかし内供は、自分が僧であるために、幾分でもこの鼻に煩<sup>わづらわ</sup>される事が少くなつたと思っていない。内供の自尊心は、妻帯と云うような結果的な事実<sup>じじつ</sup>に左右されるためには、余りにデリケートに出来ていたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損<sup>きそん</sup>を恢復<sup>かいふく</sup>しようと試みた。

第一に内供の考えたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のいない時に、鏡へ向って、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫<sup>くふう</sup>を凝<sup>こ</sup>らして見た。どうかすると、顔の位置を換えるだけでは、安心が出来なくなつて、頬杖<sup>ほおづえ</sup>を

ついたり頤あごの先へ指をあてがったりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあった。しかし自分でも満足するほど、鼻が短く見えた事は、これまでにただの一度もない。時によると、苦心すればするほど、かえって長く見えるような氣さえした。内供は、こう云う時には、鏡を箱へしまいながら、今更のようにため息をついて、不承不承にまた元の経机きょうづぐえへ、観音経かんのんぎょうをよみに帰るのである。

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧供講説そうぐこうせつなどのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従ってここへ出入する僧俗たぐいの類も甚だ多い。内供はこう云

う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水干すいかんも白の帷子かたびらもはいらない。まして柑子色こうじいろの帽子や、椎鈍しいにびの法衣ころもなぞは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。――しかし鍵鼻かぎばなはあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、年甲斐としがいもなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所為しよゐである。



最後に、内供は、ないてんげてん内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた事がある。けれども、もくれん目連や、しゃりほつ舍利弗の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論りゆうじゆ竜樹やめみよう馬鳴も、人並の鼻を備えた菩薩ぼさつである。内供は、しんたん震旦ついでの話の序にしよくかん蜀漢のりゆうげんとく劉玄德の耳が長かつたと云う事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どのくらい自分は心細くなくなるだろうと思つた。

内供がこう云う消極的な苦心をしながらも、一方ではまた、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云うまでもない。内供はこの方面でもほとんど出来るだけの事をした。からす烏

瓜<sup>うり</sup>を煎<sup>せん</sup>じて飲んで見た事もある。鼠<sup>いばり</sup>の尿<sup>いばり</sup>を鼻へなすって見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上にぶら下げているではないか。

所がある年の秋、内供の用を兼ねて、京へ上った弟子<sup>でし</sup>の僧が、知己<sup>しるべ</sup>の医者から長い鼻を短くする法を教わって来た。その医者と云うのは、もと震旦<sup>しんたん</sup>から渡って来た男で、当時は長樂寺<sup>ちやうらくじ</sup>の供僧<sup>ぐそう</sup>になつていたのである。

内供は、いつものように、鼻などは気にかけないと云う風をして、わざとその法もすぐにやって見ようとは云わずにいた。そうして一方では、気軽な口調で、食事の度毎に、弟子の手数をかけ

るのが、心苦しいと云うような事を云った。内心では勿論弟子の僧が、自分を説伏<sup>ときふ</sup>せて、この法を試みさせるのを待っていたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに対する反感よりは、内供のそう云う策略をとる心もちの方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであろう。弟子の僧は、内供の予期通り、口を極めて、この法を試みる事を勧め出した。そうして、内供自身もまた、その予期通り、結局この熱心な勧告に聴従<sup>ちやうじゆつ</sup>する事になった。

その法と云うのは、ただ、湯で鼻を茹<sup>ゆ</sup>でて、その鼻を人に踏ませると云う、極めて簡単なものであった。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしている。そこで弟子の僧は、指も入れられないような熱い湯を、すぐに提ひさげに入れて、湯屋から汲んで来た。しかしじかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯気に吹かれて顔を火傷やけどする惧おそれがある。そこで折敷おしきへ穴をあけて、それを提の蓋ふたにして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸ひたしても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云った。

——もう茹ゆった時分でござろう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだろうと思ったからである。鼻は熱湯に蒸むされて、蚤のみの

食ったようにむず痒い<sup>がゆ</sup>。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立っている鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になって、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下<sup>うえした</sup>に動くのを眼の前に見ているのである。弟子の僧は、時々気の毒そうな顔をして、内供の禿<sup>は</sup>げ頭を見下しながら、こんな事を云った。

——痛うはござらぬかな。医師は責<sup>せ</sup>めて踏めと申したで。じやが、痛うはござらぬかな。

内供は首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。所が

鼻を踏まれているので思うように首が動かない。そこで、上眼うわめを  
使つて、弟子の僧の足に輝あかざれのきれているのを眺めながら、腹を立  
てたような声で、

——痛うはないて。

と答えた。実際鼻はむず痒い所を踏まれるので、痛いよりもか  
えつて気もちのいいくらいだったのである。

しばらく踏んでいると、やがて、粟粒あわつぶのようなものが、鼻へ出  
来はじめた。云わば毛をむしった小鳥をそっくり丸灸まるやきにしたよう  
な形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて独り言のよう  
にこう云った。

——これを鑷子<sup>けぬき</sup>でぬけと申す事でござった。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙って弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のように取扱うのが、不愉快に思われたからである。内供は、信用しない医者の手術をうける患者のような顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子<sup>けぬき</sup>で脂<sup>あぶら</sup>をとるのを眺めていた。脂は、鳥の羽の茎<sup>くき</sup>のよ  
うな形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほっと一息ついたよ  
うな顔をして、

——もう一度、これを茹でればようござる。

と云った。

内供はやはり、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云うなりになっていた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、いつになく短くなっている。これではあたりまえの鍵鼻と大した変りはない。内供はその短くなった鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極きまりが悪るそうにおずおず覗のぞいて見た。

鼻は——あの顴あごの下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅わずかに上唇の上で意気地なく残喘ざんぜんを保っている。



所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕あとであるう。こうなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。――鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはしないかと云う不安があつた。そこで内供は誦經ずぎようする時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そつと鼻の先にさわつて見た。

が、鼻は行儀ぎようぎよく唇の上に納まつているだけで、格別それより下へぶら下つて来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依

然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書写の功を積んだ時のような、のびのびした気分になった。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しそうな顔をして、話も碌々せず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そのみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらえていたが、とうとうこらえ兼ねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかつた下法師たちが、面と向っている間だけは、慎んで

聞いていても、内供が後うしろさえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。――勿論、中童子や下法師が晒わらう原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ晒うにしても、鼻の長かった昔とは、晒うのにどことなく容ようす子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽こっけいに見えると云えば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

――前にはあのようにつけつけとは晒わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々こう呟く事があつた。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を思い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまうのである。——内供には、遺憾ながらこの問に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこっちで何となく

物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸に陥おとしれて見たいような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

そこで内供は日毎に機嫌きげんが悪くなった。二言目には、誰でも意地悪く叱しかりつける。しまいには鼻の療治りようじをしたあの弟子の僧でさえ、「内供は法慳貪ほうけんどんの罪を受けられるぞ」と陰口をきくほどになった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯いたずらな中童子である。あ

る日、けたたましく犬の吠<sup>ほ</sup>える声がするので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片<sup>きれ</sup>をふりまわして、毛の長い、痩<sup>や</sup>せた彪<sup>むく</sup>犬<sup>いぬ</sup>を逐<sup>お</sup>いまわしている。それもただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と噓<sup>はや</sup>しながら、逐いまわしているのである。内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、したたかその顔を打った。木の片は以前の鼻持<sup>はなも</sup>上<sup>た</sup>げの木だったのである。

内供はなまじいに、鼻の短くなっただのが、かえって恨<sup>うら</sup>めしくなっただ。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見え

て、塔の風鐸ふうたくの鳴る音が、うるさいほど枕かよに通つて来た。その上、寒さもめつきり加わったので、老年の内供は寝つこうとしても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふと鼻がいつになく、むず痒かゆいのに気がついた。手をあてて見ると少し水すい気が来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起ったのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花かうげを供そなえるような恭うやうやしい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟つぶやいた。

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内の

銀杏いちようや橡とちが一晩の中に葉を落したので、庭は黄金きんを敷いたように  
明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだうすい  
朝日に、九輪くりんがまばゆく光っている。禅智内供は、蔀しとみを上げた縁  
に立って、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰って  
来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜ゆうべの短い  
鼻ではない。上唇の上から顎あごの下まで、五六寸あまりもぶら下つ  
ている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また元の通  
り長くなったのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が短くなつ



た時と同じような、はれられした心もちが、どこからともなく  
帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒わらうものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁ささやいた。長い鼻をあけ方の秋風にぶ  
らつかせながら。

（大正五年一月）

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---